タイトル:「『増補版』九十歳。何がめでたい」(全302ページ)

出版社:小学館文庫

初版第一刷発行:2021 年 8 月 11 日

著者紹介: 佐藤 愛子(さとう あいこ、1923 年(大正 12 年)11 月 5 日)は、日本の小説家 。大阪市生まれ、西宮市育ち。小説家・佐藤紅緑 と女優・三笠万里子 の次女として出生。異母兄に詩人・サトウハチローと脚本家・劇作家の大垣肇。甲南高等女学校(現 甲南女子高等学校)卒業。

内容 : 御年九十二歳、もはや満身創痍。ヘトヘトでしぼり出した怒りの書。全二十八編。

目次

こみ上げる憤怒の孤独
—「90 歳と言えば卒寿、白寿まで頑張って」と言われて、「はあ・・ありがとうございます」と浮世の義理でそう答えるけれど、『卒寿?ナニがめでてえ!』
来るか?日本人総アホ時代
—もう「進歩」はこのへんでいい。更に文明を進歩させる必要はない。進歩が必要だとしたら、それは人間の精神力である。私はそう思う。
老いの夢
—それはポックリ死で、現実には掴めないことをわかっていての夢であり、私たちの夢はとうとうここまで来てしまったのだ、と思いつつ。
人生相談回答者失格
—回答者の私は「自分の弱さと戦う!」「あとは勝手にしろ、もう知らん!」と投げ出すしか。私はとうてい、相談ごとの回答者にはなれっこないのである。
二つの誕生日
—11 月 5 日と 25 日の両方があるが、本当は 5 日、でも戸籍では 25 日。性格も運勢も異なる。

ソバプンの話

—ソバプンとは、そばに行くとプンと臭う人の事。迷惑なら、その人に直接はっきりと言うべき。

我ながら不気味な話

—町の音はいろいろ混じっている方がいい。それに文句を言う人が増えてきているというのは、この国か衰弱に向う前兆のような気がする。

過ぎたるは及ばざるが如し

—日本のトイレの進化は止まらない。

子供のキモチは

—昔の日本には、損得よりも寛容な心を持つ人間が多かった。それが日本の子供の成長を促していた。

心配性の述懐

—心配の量と質は現代に至って半減した、しかしその変質を「進歩」と呼ぶべきかどうか、私は迷う。

妄想作家

—私が直木賞を受賞した日は、アポロが月面着陸した日の前日、その夜に私が見た月は満月だったのだか本当は三日月で、妄想だったらしい。読者の皆さん、私の言う事は信じないて下さい、そうとでも言うしかしょうがないのである。

蜂のキモチ

—生きものは全て、人間に利用されるために生まれているわけではない。すずめ蜂も含め、共にこの世を生きる難しさなのですねえ。

お地蔵さんの申子

—私の親友の子授け地蔵により生まれた子はもう 47 歳、そのお嫁さん探しに協力中。

一億論評時代

—漫画のサザエさんで「カツオが学校や家で怒られるシーンに違和感がある」とのコメントがあるそうだが、漫画を心から楽しめる人こそ「幸せを心に持っている人」だと思うのである。

グチャグチャ飯

—捨て犬だった「ハナ」を汁飯で育てて 14 年、ハナの死後ハナに対する私の姿勢（忙しかったので特別に可愛がった訳ではない）を悔いいる私。

覚悟のし方

—歳月は覚悟も勇気もなし崩しにする容赦ない力があり、やがて来るかもしれない失意の事態に対する「覚悟」が必要。そうして今の 92 歳の私がある。

懐かしいいたずら電話

—あの頃は毎日が忙しく、元気が横溢していて、いたずら電話も多かった。ああ、あの頃が懐かしい。

思い出のドロボー

—原爆被災者絡みの騙りで、現金を盗まれてしまった。

〃　（承前）

—テレビ番組の「あの人に会いたい」で、その彼女（ドロボー）に会ってみたい。

悔恨の記

—不用品を何でも引き取ると言うので呼んでみたが、業者の期待するモノは我が家には無い。無理に余っていたスイカを食べさせたが、あの素直な青年のおナカは大丈夫だったかしらん。ゴメン。

懐旧の春

—私はまだ花粉症と言う名前が無い頃からの古くからの花粉症患者だったが、91 歳の春に治まった。でもそれはアレルギー反応が起る体力がなくなったという事らしい、花粉症時代のあの頃がしみじみ懐かしい。

平和の落し穴
—平和な時代には、悩んで考え込む必要はない。強さ、自立心は生まれず、生まれるのは依存心という事か。平和にはこんな落とし穴がある事にやっと気がついたのであった。
老残の悪夢
—文明社会という非人間的な進歩に追い付けない老いぼれは取り残され、文句を言いながら、無駄ゼニばかりを出さされる。かと言って一人では生きられないし、でも死ぬに死ねぬ情けなさ。・・・もう知らん！勝手にせえ！
いちいちうるせえ
—この頃のこの国が住みにくく感じるようになったのは、何かにつけて雨後の筍のように出てくる「正論」のせいで、しかしそう感じるのは私がヤバン人であるためだという事がここまで書いてきてよくわかったのである。
答は見つからない
—「人間というものはつくづく難儀に出来ているものなんですねえ」嗟嘆するのみである。
テレビの魔力
—テレビの制作にたずさわる人たちの「視聴者は他愛のないことを喜ぶ」という思い込みのために、最近のテレビはつまらなくなっている、と私は考える。
私なりの苦労
—私はいつもふざけているようだけれど、芯のところでは真面目で真剣な人間である。そんな私に、お気軽な質問、例えば「人生で一番大切な事は？」を受ける。したり顔で答えられるか。簡単にいうな、と怒りたくなる。人生をいかに生きるか、なんて考えた事もない。その場その場でただ突進するのみだった。
私の今日この頃
—長生きすると、耳も眼も膝も脳ミソも、そのうち歯も悪くなる、なのに私はまだ生きている。
「ものいわぬ　婆ァとなりて　春暮るる」
おしまいの言葉
—88 歳の春に長編小説「晩鐘」を書き上げ、後はのんびりと老後生活を送るつもりだった。ところが「老人性ウツ病」になりかけていて、そんな時女性セブンよりお話を頂き、この「九十歳。何がめでたい」の連載が始まった。そのおかげで、脳細胞の失くなりかけていた力が戻って来た。人間は、「のんびりしよう」なんて考えてはダメだという事が、90 歳を過ぎてようやくわかりました。この連載を休むのは、闘うべき矢玉が尽きたからで、決して「のんびりしたい」からではありませんよ。//

単行本未収録集
『晩鐘』インタビュー「作家としての私はこれで幕が下りた」
＊書くべきことは書きつくして、もう空っぽになりました。作家としての私は、これで幕が下りたんです。

素顔を知るための一問一答
エッセイ、大声という病
＊「わたしはもう、ヘトヘトといってるでしょう！」その声が弱々しくなければならないのに、つい大声だったのがいけなかった。それで今、これを書いている。

旭日小綬章記者会見「こんなことでよろしいのかしら」

＊本書がベストセラーになり、その事を問われて、「今の時代、言いたい放題言うのが現れたから、珍しく感じられたのかなと。それぐらいしか思い当たりませんけど。『変な時代ですね』。そう思います」

対談　佐藤愛子×富士真奈美「何てめでたいひとりの日々」

＊「『グチャグチャ飯』に何度も泣いた」「皇居内を留め袖を着て走った！」「悪い人なんて、来たってどうってことない」「私、せっかちだから」

解説『九十歳。何がめでたい』刊行に寄せて/瀬戸内寂聴

＊瀬戸内さんは1922年生まれ、佐藤さんは1923年生まれ。もうお互いに病気って聞いても見舞ったりはできないでしょう。だから愛子さんが書いてくれるのが一番うれしい。これからも彼女には書き続けてほしいです。　以上